

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

大正時代の第一高等学校の寮歌の研究：
旧制高校の教育と音楽的側面からの検討

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2009-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/871

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



大正時代の第一高等学校の寮歌の研究

——旧制高校の教育と音楽的側面からの検討——

下道 郁子

1 はじめに

本論文は、高等教育における音楽教育の内容と意義を、旧制高等学校の音楽文化活動を軸に探求する研究の一環として、特に第一高等学校の寮歌に焦点をあてて研究を行うものである。本研究者は既に明治23年から45年までの第一高等学校の寮歌110曲の楽曲分析を行い、その西洋化の過程を考察した¹。また、明治時代の第一高等学校の生徒達の音楽活動全般を、学科課程、校友会活動、寮歌、に分類して、文献資料から考察した。その結果、(1)寮歌及び校友会の音楽部の活動が、唱歌教育の影響を少なからず受けている、(2)他の旧制高校と行った運動部の対抗戦が、応援歌、部歌を育んだ、(3)部活を通じた旧制高校の交流が寮歌を全国的に広める要因になった、(4)寮歌及び企画音楽会についての評論が校友会雑誌上で活発に行われた、等が理解された²。以上の先行研究を踏まえて、本研究では、大正時代の第一高等学校の寮歌、応援歌、部歌、頌歌の音楽面の分析を通して、音楽構造の西洋化の過程を中心に、音楽的特徴を明らかにしていく。また寮歌活動の基盤となった大正期の教育との関わりも検討していく。

2 大正時代と第一高等学校

新高等学校令と一高

第一高等学校六十年史によると、第一高等学校の歴史は大きく第一期と第二期に大別される。第一期は明治27年(1894)の高等学校令を起点とし、第二期は大正7年(1918)の高等学校令改正以降と分類される。大正時代は第一期から第二期への移行期、転換期と考えられる。大正7年(1918)の新しい高等学校令(12月5日公布)では、7年生高等普通教育の方針が出され、高等学校の修業年限は7年とし、うち尋常科4年、高等科3年とした。この

1 下道郁子「明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽活動」東京音楽大学研究紀要第31集 2007

2 「明治20年代～40年代の旧制高等学校の音楽教育—特に第一高等学校の音楽活動を中心に—」音楽教育史研究第11号 2009

制度は終戦まで続く。この改正で、松本高校等の官立の地名高校が設立され、武蔵、成城、成蹊等の私立の高校、また東京府立等の公立高校が設立された。官立はほとんどが高等科単科で、私立、公立は7年一貫が多かった。第一高等学校は高等学校高等科を設置、文科及び理科を置いて再出発となった。

この改正により、外形上の制度が変化しただけではなく、内容も大きく変化した。高等学校令第一条には「高等学校ハ男子の高等普通教育ヲ完成スルヲ以て目的トシ特に国民道德ノ充実ニカムヘキモノトス」³と明記されている。つまり、それまでの大学予科の立場から、独自の立場を持った教育機関となったのである。学術の淵叢の場に大学があり、専門の技術を身に付ける為に専門学校がある中、「将来国家の中枢に立つ見識高邁なる人材を養成せんには特に人物完成の一機関を必要とす」と高等学校の役割に人間形成が明言された⁴。この改訂による高等学校の文科と理科のカリキュラムを表1と表2に示す。

学科課程の改正で注目すべきことは、外国語の時間数である。改正前は、第一、第二外国語で2/3ほどを占めていたが、「たんに大学在学中の便否のみに拘らず、国家社会に立てる際の便宜を考え、且つは時世の趨勢に鑑みるところあり」⁵と考え、第一外国語を本位とし、第二外国語の時間を半減して、随意科としたことである。また文理両科の専門学科偏重の弊害を直すために、文科に哲学概説、数学、自然科学を、理科に法制と経済を加えた。

外国語は英語、ドイツ語、フランス語で、第一外国語の選択語学により、甲、乙、丙という三組に組分けされた。つまり文科甲は英語、乙は独語、丙は仏語、また理科甲は英語、乙は独語、丙は仏語であった⁶。規則改定では大正9年に学年開始期を9月1日から4月1日と改める。大正10年に新高等学校令による高等科の文科、理科生徒が入学し、この年から新学期開始が4月となる。

表1 文科の各学年における各学科目における毎週時間数（第19条）⁷

科目 学年	修身	国語及び漢文	第一外国語	第二外国語	歴史	地理	哲学概説	心理及び倫理	法制及び経済	数学	自然科学	体操
一	1	6	9	(4)	3	2				3	2	3
二	1	5	8	(4)	5			2	2		3	2
三	1	5	8	(4)	4		3	2	2			3

3 「第一高等学校六十年史」p345

4 「第一高等学校六十年史」p346

5 「第一高等学校六十年史」p346

6 理科丙は大正11年（1922）に文部省、官立高等学校高等科選抜試験規定により、加えられる。

7 大正8年3月29日 文部省令第8号 高等学校規定による

表2 理科の各学年における各学科目における毎週時間数（第19条）

科目 学年	修身	国語及び漢文	第一外国語	第二外国語	数学	物理	化学	植物及び動物	鉱物及び地質	心理	法制及び経済	図書	体操
一	1	4	8	(4)	4			2	2	3	2	2	3
二	1	2	6	(4)	4	3	3	2		2		2	3
三	1		6	(4)	4 (2)	講実 義験 3 2 5	講実 義験 3 2 5	講実 義験 2 2 4	2			(2)	3

寮生活等

大正時代は憲政擁護運動を背景に、度重なる政権の交代という激動の幕開けとなった。しかし吉野作造の民本主義が指導理念となり、いわゆる大正デモクラシーが高揚した時代でもある。こうした社会情勢を背景に、一高寄宿寮にも新たな思想の動向があった。「社会思想研究会」(大正8年 1919～大正14年 1925)が結成されたのは、その一例と考えられる。また、米価をはじめ、物価の高騰から食費が値上げされた。スポーツ競技は活発化し、陸上運動部、端艇部、庭球部の対三高戦が、明治39年(1906)に始まった野球部の対三高戦に加えて、定着した。

大正8年(1919)に新寮が二棟落成し、和寮と東寮と命名される。この年、自炊が認可される。また学校敷地を駒場に移転する問題も起こり、大正12年(1923)の関東大震災はその事業に拍車をかけた。この大震災の際には寄宿寮において一高震災救護団が組織された。寮生は他校に率先して社会救済に当たるが、世の中の秩序が回復すると、その活動が失業者の仕事を奪うと解散した。しかしこれが契機となり、一高共済部を作り先輩からの寄付金で活発に活動する。しかし活動に行き詰まり、13年に解散した。その後、高等教育解放の扶助機関の必要性から再興、家庭教師筆耕等の内職の斡旋や学費の貸与等の活動を行う。

大正14年(1925)には同窓会が設立した。その活動は、事業として会報及び名簿の発行、地方会員訪問、記念祭における会員の接待、校友会及び校内団体への費用補助、寮歌作詞作曲者の調査等、多岐に及んだ。特に寮歌の調査、発展、整理、保存、伝承には、重要な活動拠点とも言える。この年、陸軍現役将校学校配属令により、学校教練が実施される。

大正時代の校長

大正期の一高は4人の校長に率いられた。キリスト教者、文部省官吏、文学者とそのプロフィールは多彩であり、学業の面はもちろんのこと、寮生活においても、生徒達に少なからず影響をもたらした。

新渡戸稲造 (1862-1933)、校長在職 1906-1913 (明治 39-大正 2)

札幌農学校の二期生として入学した。クラーク博士の帰国後ではあったが、キリスト教の影響が強く、洗礼を受ける。東京大学に進学後、「太平洋の架け橋になりたい」と米国へ留学、さらにドイツでも研鑽を積んだ。体調を崩してカリフォルニアで療養中に英語で執筆した「武士道」は、多くの語に翻訳された名著である。明治 31 年 (1898) に「農業本論」を出版し、この著作が認められ、本邦初の農学博士となる。その他明治 39 年、植民地政策の論文により法学博士となり、その年東京帝大農科教授と第一高等学校校長とを兼務する。明治 42 年 (1909) からは東京帝大法科大学教授。明治 44 年 (1911) に米交換教授としてアメリカで一年間に 166 回講演している。在職中の一高では、一高の伝統的校風である籠城主義と、新渡戸校長のソーシアリティーが対立し、崇拜する学生と、反感を持つ学生とがいた。大正 2 年 (1913) に突然更迭された為、生徒達により復職留任運動が起こった。寮委員会主催で新旧校長の歓送迎会が開かれ、晩餐会終了後、寮生数百名が新渡戸校長を私邸まで送り、「新渡戸校長惜別歌」を歌った⁸。

瀬戸虎期 (1869-1920)、校長在職 1913-1919 (大正 2-大正 8)

第一高等中学校、東京帝大理科大学物理学科卒業後、東京師範学校、第六高等学校の各教授等を経て、文部省視学官兼第一高等学校教授となる。大正 2 年 (1913) から一高校長となり、在任中は特に寮内設備の改善に尽力し、八寮を完成させた。新渡戸校長からの交代には、一部の生徒の批判も強く、設備に力を入れる瀬戸校長に対し、「われわれが求めているのは校長の精神的指導力である。校長は文部省に唯々諾々ではないか」といった発言が相次いだ⁹。瀬戸校長は病気のため大正 8 年 (1919) に辞職し、翌年逝去した。葬儀には寮生一同が会葬し、「菓餌に親しみ…転地療養中なりしが、尚四六時わが寄宿寮のこと念頭を離れず、われら寮生を鞭撻し、以って向陵の意気振興に努められたり」と哀悼の意を表した。

菊池寿人 (1864-1942)、校長在職 1919-1924 (大正 8-大正 13)

第一高等中学校文科卒で同級に夏目漱石、正岡子規がいた。東京帝大文科大学では国文学を専攻、大学院に学び、陸軍教授に任官、明治 31 年 (1898) に第一高等学校教授となった。大正 9 年 (1920) に校長に就任したが、健康を害し、同 13 年 (1924) に退任、その後は講師として国語科の授業を昭和 14 年 (1939) まで担当した。大正 15 年 (1926) に山中湖畔に完成した一高の寮を「嘯雲寮」と命名した。

杉敏介 (1872-1960)、校長在職 1924-1929 (大正 13-昭和 4)

杉家は吉田松蔭の実家にあたる。山口高校から東京帝大の国文科を卒業後、明治 32 年 (1899)

8 「自治寮六十年史」 pp.97-99

9 「自治寮六十年史」 pp.87-88

に第一高等学校教授となり、国文学と国文法を講じる。『吾輩は猫である』の津木ピン助のモデルと言われる。校長在任中は、関東大震災後の混乱に果敢に対処し、駒場移転問題を東大と折衝した。

3 大正時代の一高寮歌

寮歌活動概観

大正8年(1919)に旧東寮に代わって、新寮が2寮完成し、東寮と和寮と命名される。これで、東寮、西寮、南寮、北寮、中寮、朶寮、和寮の合計7寮と増加したため、総代会で、記念祭の各寮寮歌募集をやめ、全寮からおよそ2編を選ぶことになった。大正8年(1919)2月には、岡崎嘉平太ら13名の寮歌選定委員と寮委員有志で寮歌選考会を開き、応募14件から2寮歌を、東和寮落成記念歌応募2件から1編を選んでいる。楽友会員と委員が集まり、当時、楽友会の指導者であり、東京音楽学校の教授であった作曲家の弘田龍太郎に、歌ってもらって選定したと、記録にある¹⁰。大正9年(1920)には西寮が、西寮と明寮の2寮に立て替えられ、寮は合計で8寮となる。

寮歌集の楽譜

本研究で資料として使用する楽譜は、平成16年(2004)の最終改訂版である。初版が明治37年(1904)に出版されて以来、毎年新寮歌が追加されており、版を重ねる度に変化があったのは当然であるが、特徴的な変化として(1)記譜の種類、(2)作曲者、作詞者名が記されているか、(3)原譜か現行版か、があげられる。

表3 寮歌集の変遷

出版年	記譜の種類	作者名	原譜か現行版か
明治37年版(初版)	数字譜	なし	原典
大正13年版	数字譜	若干記される	歌っている通り ¹¹
昭和10年版	五線譜	同窓会誌上で調査、大幅に判明、増加	生きている節回し ¹²
昭和21年版	音譜なし		
平成16年版	五線譜	大方記載	原典と普及の両方
	数字譜(原典)		

10 「第一高等学校六十年史年表」p.63

11 向陵駒場 vol.10 No.3 1968 7「寮歌集回顧(2) 竹中雪 pp.38-40

12 向陵駒場 vol.10 No.3 1968 7「寮歌集回顧(2) 今井紹雄 pp.48-51

楽曲の分析

寮歌の歴史は約五期に区分される¹³。この時代区分は一高だけではなく同時に旧制高校の寮歌全般にも適応できると考えられる。

第1期 明治24～31年(1891～1898)：揺籃時代

第2期 明治32～43年(1892～1910)：第一次開花期

第3期 明治43～大正15年(1910～1926)：第二次開花期

第4期 昭和2～10年(1927～1935)：昭和前期

第5期 昭和11～24年(1936～1949)：昭和後期(イ)戦前、(ロ)戦中、(ハ)戦後

本研究の対象時期は大正2年(1913)～大正15年(1926)とするため、第二次開花期に対応する。五線譜化されている大正2年から15年までの寮歌96曲、応援歌、部歌、頌歌11曲の音階、リズム、調性、形式、曲想記号を分析し、一覧にしたものを付録に示す。分析対象曲は五線譜があるものとした。大正4年(1915)柔道部凱歌「仇敵北に」は「平沙の北に」(明治38年 1905)の譜、大正8年(1919)銃剣部部歌「瑞雲映ゆる」は「東皇回る」(同年、東和寮落成記念歌)の譜と記されてあるのみで、譜面がないので対象曲からは外す。よって分析対象曲は寮歌96曲、応援歌、部歌、頌歌9曲、合計105曲とする。以下付録の一覧表に示した6つの音楽要素に関して、考察していく。

(1) 拍子

寮歌は太鼓と手拍子で拍子をとりながら歌うのが一般的である。そのため拍子感ははっきりしている。

2/4拍子が55曲、4/4拍子が22曲、3/4拍子が15曲、6/8拍子が7曲、12/8拍子が1曲、拍子が途中で変化するものが5曲で2/4拍子が半数以上を占める。3/4拍子は大正5(1916)年までは0だが、大正10(1921)年以降に10曲あり、大正15(1926)年に4曲も集中している。6/8拍子7曲の内4曲は東大、京大の寄贈歌である。1曲のみの12/8拍子も京大の寄贈歌である。結果は表4に示す。

表4

拍子	2/4拍子	4/4拍子	3/4拍子	6/8拍子	12/8拍子	途中変化
曲数	55	22	15	7	1	5
割合/105	52.40%	21.00%	14.30%	6.70%	0.90%	4.70%

(2) 調性

寮歌の多くが、和声的に分析が可能ではないので、厳密に言うと、長調、短調という分類は適切ではない。歌われる時に、半音上がったたり、下がったりと、音程が不安定なことが多く、

13 井上司朗「一高寮歌私観(一)」向陸駒場 p.11-22 Vol.XIV No.2 1972

同じ曲の中でも短調になったり長調になったり等、歌われる機会ごとに変化するのが一般的である。また原譜は数字譜で、主音を1、主音の実音を「はにほへといろ」で示し、○調と表記し、長短の区別はされていない。例えばハ長調のドから始まる場合は「は調 1」と記され、ハ短調のドから始まる場合も「は調 1」と記される。

今回の分析では、音階の3度と6度が、主音に対しそれぞれ長3度、長6度のものは「長」と、短3度、短6度のものは「短」と分類し、終止音と共に記した。曲の途中で転調して、他の調で終わる曲は「その他」とした。結果は表5に示す。

表 5

調	ハ長	ハ短	ニ長	ニ短	ホ長	変ホ長	ヘ長	ヘ短	ト長	イ長	変ロ長	変ロ短	その他
曲数	38	8	17	2	5	6	4	3	11	1	6	2	2
割合/105	36.2%	7.6%	16.2%	1.9%	4.8%	5.7%	3.8%	2.9%	10.5%	1%	5.7%	1.9%	1.9%

ニ短（1曲のみ）は大正9年（1920）の九大寄贈歌「漁り火消えゆき」、イ長（1曲のみ）は大正10年（1921）東大寄贈歌「と安の春も」である。

(3) 音構造

今回の分析では数字譜の理論に従い、音階の1番目の音をd（ド）として、移動ド読みでdrmfsltd（ドレミファソラシド）と記した。短調の場合も同様に音階の1番目の音をd（ド）として記した。第4音のfと第7音のtの有無に着目して、分析を行った。結果は表6に示す。

表 6

音階	第4音、第7音(f, t)ともに無い=五音音階	五音+第4音(f)のみが有る	五音+第7音(t)のみが有る	五音+第4音、第7音(f, t)共に有る=全音階
曲数	38	22	15	30
割合/105	36.20%	21.00%	14.20%	28.60%

(4) リズム型

「単付点」と表記したリズム型は、付点8分音符+16分音符、又は倍の付点4分音符+8分音符の、寮歌や軍歌に典型的なピョンコ節と呼ばれるリズムパターンで、78曲（74.3%）である。「その他」と表記したのは、「単付点」とは判断できないリズム型で、27曲（25.7%）である。「その他」は大正11（1922）年以降に12曲と集中している。

(5) 形式

形式は4小節を一単位に、アルファベットで記した。4/4拍子の曲は2小節を一単位とした場合もある。4の倍数にあたる小節において、主音で終わっている場合は終止とみなしカンマ「,」で区切った。例えばabaはaと全く同じフレーズが現れたことを示し、a' a"は変容されたフレーズが現れたことを意味する。結果は表7に示す。

表7

形式	全く同じ繰り返しがある(aba等)	変容された繰り返しがある(aba'等)	全く同じ繰り返しと、変容された繰り返しのある両方がある(abaca'等)	繰り返しはない(abcdef)
曲数	6	37	4	58
割合/105	5.70%	35.20%	3.80%	55.20%

全体的に洋式楽曲の特徴である対比と繰り返しというパターンはほとんどなく、徒然なるままの変容形式が半数以上を占めている。しかし似通ったフレーズが再び現れる曲は約1/3の37曲にもなる。全く同じフレーズと似通ったフレーズが両方現れる「洋式スタイル」に近い曲は4曲であった。

(6) その他：強弱、曲想表示、ブレス、フェルマータ等

上記の記号や指示があった曲は28曲と少ない。EXは曲想表示を意味し「快活に」「穏やかに」といった日本語での表示がほとんどである。Vは息継ぎのブレス記号、Dはダイナミクスの強弱記号、Fはフェルマータ、Tはテンポ表示を示す。

大正12年(1923)の卒業40年記念歌「あわれら」は、大譜表のピアノ伴奏付きで、洋式楽曲としてかなり完成された作品である。

明治時代の寮歌との比較、考察

明治期は110曲のうち3/4拍子は4曲であったが、大正期は105曲中15曲と曲数も割合も増えている。大正期の名曲として愛唱されている歌にも3拍子が多く、日本人にも3拍子の曲調が親しまれてきたことが、推測される。

調性は「は調」「に調」の曲が多いが、これは記譜上の問題であり、実際に長調系で歌い継がれてきたのか、短調系で歌い継がれてきたのか、又は混合系なのかは、譜面からは不明である。また今回はデータ化しなかったが、音域がかなり高い歌も多かった。二点ホ、二点ヘ等は、寮歌が男子生徒の為の歌であったことを考えると、かなり高い音である。音程を正しく歌うことを前提に書かれた譜ではないと考えられる。

音構造は、明治期はほとんどがヨナ抜き長音階(ドレミソラ)で、次にヨナ抜き短音階(雅楽呂旋法又は都節音階)であったが、大正期は7音からなる全音階、又はそれを指向した第4

音や第7音を含む音階が増えている。和声構造が洋楽式になっているかどうかは、今回は詳細な分析を行っていないが、ドミナント→トニックのカデンツァがはっきりした曲が増えている。また卒業40年記念歌「ああわれら」（大正12年（1923）、三谷雄一郎作詞作曲、原良郎編曲）は、四声体のピアノ伴奏譜がついており、I、IV、Vといった単純な和音の組み合わせであるが、様式の和声進行が、一高生の一部に浸透したと推測できる。

リズムは軍歌調の単純な付点音符のリズムが圧倒的に多い。今回はデータ化しなかったが、アウフタクトが多くなったこと、また「その他」に分類されたリズムに、西洋の器楽曲風の多様なリズムパターンの組み合わせや、リート風の流麗なリズムがみられる。大正13年（1924）の『宴して』では三連符も多用されている。

形式は西洋楽曲の基本構造である「対比と繰り返し」の、繰り返しを持つ曲が約半数にまで増えたことがわかる。しかし繰り返しがはっきりと現れる洋式楽曲的な統一感を持った曲が、必ずしも人気寮歌として愛唱されたとも言えない。基本的には洋式楽曲の特徴である「対比と繰り返し」というパターンはほとんどなく、徒然なるままの変容形式である。おそらく日本の伝統的なスタイルとも言えるこの徒然なるままの変容形式が、当時の寮生にとって自然であったと考えられる。

また弘田龍太郎のようなプロの作曲家へ作曲を依頼したことや、箕作秋吉のようなプロの作曲家になった寮生の作品が多いのも、この大正期の特徴と言える。

代表的な寮歌とその作曲者

大正期の寮歌は明治期の『嗚呼玉杯』、『アムール川』、『春爛漫』と並んで、寮生や卒業生に愛唱された名寮歌が数多くある。本論文では、平成22年度の春、秋の両寮歌祭、寮歌を研究し歌い継ぐ会（詠帰会）の活動、向陵塚の例祀のうちに歌われた曲目を手掛かりに選曲し、特に音楽面と作曲者について考察していく。

第27回記念祭寮歌『若紫に夜は溶けて』橋高竇實作詞、箕作秋吉作曲 大正6年（1917）南寮 譜例1参照（2/4は誤植で3/4が正しい）

大正期の寮歌の中でも、最も人気を博した寮歌である。記念祭を迎える春の夜明けの風情、歓喜の情の高まり、武蔵野の夜空、若人の人生の淋しさを象徴主義的手法で表現し、六寮を讃え、散り行く花の下での記念祭の様子を詠んだ歌である。しかしこの歌の人気は曲が優れていたことが大きいようである。

作曲者、箕作秋吉（1895-1971）はこの曲の作曲当時は一高の工科の生徒であった。箕作家は幕末以来多くの学者を輩出した名門の家柄である。曾祖父の箕作阮甫は蘭学者、祖父は日本最初の学士院会員、父は一高、東大で教鞭をとった歴史学者である。箕作秋吉は東大では応用化学を専攻、後にベルリンで物理学の研究の傍ら、作曲を学ぶ。帰国後は化学者として働きながら、作曲活動を続け、日本の現代作曲界の代表者として活躍した。『若紫に』の他に、大正

4年（1915）に御大典奉祝歌『東海波は太平の』を作曲し、大正5年（1916）に『わがたしひの故郷は』（京大）を作曲している。これは京大の寄贈歌なので、京大生から頼まれるほど、彼の作曲の才能は傑出していて、有名だったのかもしれない。他に『眠れる獅子の』（大正7年（1918）朶寮）、東大在学中に『時の流れもゆるやかに』（大正8年（1919）東大）を作曲している。

ト長調であるが、ホ短調の中間部を挟んだ、不均等な三部形式である。付点のリズムが基調になっているが、軍歌調ではなく、マズルカ風のリズムである。在学中、楽友会に属していた箕作秋吉は、卒業後に楽友会の演奏会の為に、『若紫に』の旋律を主題とした管弦楽円舞曲「若き日の思い出」を作曲している。他の寮歌とは曲調を異にしていたので、一部の人には歌われなかったのであるが、この演奏以来この寮歌は流行したと、楽友会の記録にある¹⁴。

寮歌作曲の思い出を、「私の歩んできた音楽の道」の中で、箕作秋吉は次のように述べている。

…丁度一高寄宿寮の御大典奉祝歌の懸賞がありました。一年の同室の二宮君の詩が当選したのに、一夜でつけた私の曲が亦当選しましたから（審査員は弘田竜太郎氏）同室にとっては大事件で、賞金合計六円也で大コンパを開いて「喰えや、唱えや」の大きわざをしました。これが今日、作曲をやる病みつきとなったわけです。卒業の頃、弘田さんにハーモニーを習って作品一のワルツを書き、一高管弦楽団の初演奏で初演しましたが、その主題はマズルカ風の自作の寮歌「若紫に夜は溶けて」、トリオは後にNHKの婦人の時間の「楽しい我が家」のテーマとなった音楽でした¹⁵。

さらに自分の音楽の道の始まりを、中学校時代に辿っている。通っていた東京高等師範の附属中学の音楽の先生は田村虎蔵であった。田村は浦島太郎、花咲翁等の明治唱歌を作曲した人であった。中学3年の時、田村からシューベルトの歌曲やモーツァルトの魔笛を紹介されて、ピアノスコアを親にねだったと回想している。

戦後の日本の現代音楽の作曲界で活躍した箕作秋吉の音楽家への道の原点が、学校での音楽教育であり、また作曲のおもしろさを知り、専門的に勉強しようと決意したきっかけが、寮歌の作曲であったことは、一高の音楽活動が日本の音楽界発展の原動力の一端を担っていたことを、窺わせる。

第31回記念祭寮歌『弥生が丘に洩れいづる』渡邊諒作詞 弘田龍太郎作曲 大正10年(1921)

譜例2参照

作曲者の弘田龍太郎（1892-1915）は、東京音楽学校出身の作曲家で、童謡運動に作曲家

14 「向陵誌第1巻」 pp.1128

15 箕作秋吉「私の歩んできた音楽の道」音楽芸術14（8）pp.42

として参加、協力した人である。『靴がなる』（大正 8 年 1919）、『叱られて』（大正 9 年 1920）、『雀の学校』（大正 10 年 1921）等の日本の代表的な童謡、歌曲を作曲している。彼は衰退を繰り返していた一高楽友会を、大正 3 年（1914）から指導するようになり、その活動は再び活発になった。『散りし櫻を踏みなづみ』（大正 4 年（1915）京大）、『杳かなる日のうれしさに』（大正 14 年（1925））、『正気あふるる』（大正 12 年（1923）野球部応援歌）等を作曲している。

『弥生が丘に洩れいづる』は記念祭当日の寮生の心情を表現している。作詞の渡邊諒は楽友会に属し、寮歌についての文章を『校友会雑誌』に寄稿する学生評論家でもあった。3 拍子にのせた 2 種類の付点リズムパターンの繰り返しが、統一感を与え、覚え易く歌い易い曲である。前半と、曲の最後の 2 カ所で、最高音の二点ホに向かって旋律を上げていくことにより、寮生の気持ちの高ぶりや、希望を巧みに表現している。

箕作秋吉の『若紫に』が全音階で書かれていたのに対し、『弥生が丘に洩れいづる』はヨナ抜き長音階（五音音階）で書かれている。箕作秋吉が交響曲や室内楽を書く、現代作曲家になったのに対し、日本歌曲の作曲家として活動した弘田龍太郎のこの寮歌が、日本人に馴染み易い五音音階で書かれているのは納得できる。『弥生が丘に洩れいづる』を作曲した同年に、『雀の学校』を作曲していることを考えると、歌う年齢層を考慮し、歌詞にあった旋律やリズムで曲をつける、弘田龍太郎のプロフェッショナルな技術や音楽性が、この寮歌でも証明されたと言える。

ピアノ科出身の弘田龍太郎は、楽友会の演奏会でもピアノ独奏や伴奏、管弦楽や合唱の指揮と、多彩に活躍している。例えば大正 9 年（1920）の帝大基督教青年会館において催された第 14 回演奏会では、シューマンの *Zigeunerleben*（原文まま）の合唱指揮、モーツアルトのセレナーデの弦楽四重奏、ショパンのプレリュード第 6 番、第 7 番と *Duixième Mazurka*（原文まま）のピアノ独奏、グノーの「ファウスト」からの兵士の合唱のピアノ伴奏で出演している。翌年の箕作秋吉の管弦楽円舞曲「若き日の思い出」がプログラムにある演奏会では、『かもめ』、『牧人の嘆き』、『叱られて』の自作の曲のピアノ伴奏を務めている¹⁶。このように弘田龍太郎の一高での音楽活動は、寮歌や楽友会の活動を活性化、発展させたと言える。彼の一高における音楽教育への貢献には、多大なものがあった。

ここで楽友会の活動を、簡単に記しておく。大正 3 年（1914）弘田龍太郎氏が指導者として就任する。この頃は主に、重音唱歌の練習等をしていった。大正 4 年（1915）の幹事に箕作秋吉の名前がある。大正 8 年（1919）に管弦楽部が創立される。蓄音機音楽会というのを大正 7 年（1918）は 2 回、大正 8 年（1919）には 8 回開催している。大正 7 年（1918）～大正 14 年（1925）まで、演奏会を定期的に開催しているが、弘田龍太郎氏の指導のもとに、そのプログラムは毎年飛躍的に発展していった。

16 「向陵誌第 1 巻」 pp.1124-1128

第 36 回記念祭寮歌『烟り争ふ春霞』榎本謹吾作詞 安藤熙作曲 大正 15 年 (1926)

譜例 3 参照

作詞の榎本謹吾は社会科学研究会の關志であった。1 番、3 番、6 番は寮生活を送る若者の心をえぐるような言葉がちりばめられた歌詞となっている。一方で 4 番には、当時の世相を反映して、社会主義、共産主義運動の高揚ともとれる言葉が出てくる。

作曲者の安藤熙は、当時文科乙類の生徒であった。後に一高の教授となる。専門はドイツ文学であるが、高木卓の名前で小説も書き、芥川賞に選ばれたにもかかわらず固辞したことで、注目を浴びた。母は幸田露伴の妹で、ヴァイオリニストの安藤幸（旧姓は幸田幸）で、伯母はやはり日本人として先駆的な西洋音楽活動をした音楽家の幸田延である。

3 拍子にのった付点リズムのパターンは『弥生が丘に洩れいづる』と類似している。前半が aa'ba の対比と繰り返しになっている。後半には最高音の二点ホを多用して、曲全体を盛り上げ、コーダのような締めくくりの役割を持たせている。また旧版譜や原譜では第 4 音に # の臨時記号が一方所つき、伴奏のつけ方（ハーモニー）によっては五度調への転調ともとれる。作曲者が西洋音楽に親しみ、その理論をかなり勉強していたことを窺わせる曲の作りになっている。

原譜、改訂譜、現行譜、録音の比較

寮歌集の楽譜の項でも述べたように、寮歌は歌い継がれる中で、変容していくものである。原譜と改訂譜があり録音も行われている、人気寮歌の中から『若紫に夜は溶けて』を例に考察してみたい。

譜例 4 は数字譜による原譜、譜例 5 が五線譜になった改訂版、譜例 1 が最終版である。まず譜例 4 と譜例 5 では、第 4 小節目と第 5 小節目の「ゆめにただよう」の音の数が増えたために、歌詞との対応も変わってしまっている。譜例 5 の方が音の運びも、歌詞と旋律との関係も自然で、歌い易くなっている。

譜例 5 と譜例 1 を比較すると、4 段目の 13、14 小節目の音の連なりが、同音の連打から半音上のドの音に修飾的に上行することにより、動きがでて、音楽的に魅力あるものとなっている。

次に録音と比較してみよう¹⁷。歌による録音では第 2 小節目のシの連打はシドシに、またリズムも付点ではなく四分音符が 3 つになっている。また 4 段目の 14 小節目はシドシではなくドドドと、ここも四分音符が 3 つになっている。ピアノによる録音では第 5、9、13、17、21 小節目が同音の連打をやめ、四分音符 3 つになっている。例えば第 17 小節目は、シドシからシドシへと変化している¹⁸。

このように、微妙な違いではあるが、楽譜 3 種類、録音 2 種類を比較すると、全て異なっていた。寮歌は寮生のものであるから、“生きている節回し”に変化していく。寮生に愛唱され

17 第一高等学校寮歌 CD 一高同窓会 2004

18 ピアノによる第一高等学校寮歌第 3 巻 一高同窓会

ているものほど、変化していく。実際には、さらに様々な“生きている節回し”で歌われていると、推測される。

4 まとめ

大正時代は戦争がなく、比較的平和な時代であり、また大正デモクラシーや社会主義の影響など、思想的にも自由な時代であった。今回は歌詞の研究が充分ではなかったので、社会情勢や思想との関わりを掘り下げるまでには至らなかったが、分析した3曲の寮歌にもこの片鱗は見えた。

音楽面では、3拍子が増え、愛唱歌に3拍子が多いことから、3拍子が浸透し、好まれていたと考えられる。また音構造がより西洋楽曲に近くなったといえる。半音が多用され、五音音階から7音の全音階への指向が明らかであった。形式も繰り返しが多く現れ、より西洋楽曲に近くなったと言える。

明治時代にも多くの名寮歌があったが、大正時代の寮歌の魅力には、歌詞以上に旋律やリズム等の音楽的要素がより重要になっていることも理解された。作曲をプロの作曲家に依頼したり、西洋の音楽理論を学び楽器を習うなど、西洋音楽に親しんでいる寮生の作曲から、愛唱歌が生まれている。

年月を経れば経る程、また生徒数が増えれば増える程、寮歌が歌われる機会も回数も増える。その結果、多くの“生きた節回し”が現れたが、寮生も同窓生も、原譜よりも“生きた節回し”を優先して記録していくことになった¹⁹。その結果楽譜により、また録音によって、様々な変容版に遭遇することになる。

最後に『弥生が丘に洩れいづる』の作詞者である渡邊諒の「我観察歌」（第一高等学校・大正11年）に書かれた文章を、大正時代の一生徒の寮歌観として引用する。

丘も一日は寮歌に明けて寮歌に暮れゆく、実に寮歌は向陵の珠玉なり。

寮歌は向陵の芸術であり哲学であり歴史である。且最も偽らず最も美しき生活の象徴である。中略…

我々がそれを歌ふ時過去への回想があり未来への希望があり現在への反省がある。其の一句一句が若き血潮の高調であり若人の歌であり乃至国民の叫である。その示す推移は同時に自治寮の推移であり社会思潮の反省である。寮歌は実に得難き永遠の記念物であらねばならぬ。

中略…それにつけてもこの寮歌の研究は重んじられなければならないてふ事と共に寮歌

19 向陵駒場 vol.10 No.3 1968 7「寮歌集回顧 (2) 今井紹雄 pp.48-51

に新しき型を与え、新しき生命を賦するの必要な事を私は強く主張する²⁰。

(『校友会雑誌』第二十八号(大正十一年)第一高等学校校友会)

(中略…は筆者による)

本研究は平成20年度～22年度の科学研究費補助金(研究代表者下道郁子、基盤研究C、課題番号20520133)を受けている。

(本学准教授＝音楽教育学担当)

参考文献

- 井上司朗「一高寮歌私観(二)」向陵駒場 p.11-22 Vol.XIV No.3 1972
- 今井紹雄「寮歌集の昭和版」向陵駒場 vol.10 No.3 1968 7 pp.48-51
- 下道郁子「明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽活動」東京音楽大学研究紀要第31集
2007 pp.33-52
- 下道郁子「明治20年代～40年代の旧制高等学校の音楽教育―特に第一高等学校の音楽活動を中心にして―」音楽教育史研究第11号 2009 pp.39-51
- 竹中雪「寮歌集回顧(2)」向陵駒場 vol.10 No.3 1968 7
- 箕作秋吉「私の歩んできた音楽の道」音楽芸術14(8) pp.42-45 音楽之友社 1956
- 『向陵誌』一高同窓会 1974
- 『向陵誌第1巻』一高同窓会 1984
- 『自治寮六十年史』一高同窓会 1994
- 『第一高等学校同窓生名簿』一高同窓会編、平成4年(2002)版
- 『第一高等学校六十年史』第一高等学校 1939
- 『第一高等学校六十年史年表』第一高等学校 1939
- 『第一高等学校寄宿寮寮歌解説』一高同窓会 2004
- 『寮歌集』一高同窓会 2004
- 資料集成『旧制高等学校全書』第6巻 生活・教養編(1)旧制高等学校資料保存会 1983

参考CD

- 第一高等学校寮歌CD 一高同窓会 2004
- ピアノによる第一高等学校寮歌第3巻 一高同窓会

20 資料集成 旧制高等学校全書 第6巻 生活・教養編(1) pp.306、pp.314

付録（寮名、作者者、作曲者の空欄は寮歌集に記載なし）

寮歌、寄贈歌

大正	寮名 寄贈校	歌名	作曲家 借用の曲譜	作者者	拍子	調	使われて いる音	リズム 型	形式	その他
2	東寮	ささら流れの	星野龍猪	久能木楨治	2/4	ハ長	drmfsltdrm	単付点	abc,def	
2	西寮	ああ丙日の	上沼健衛	久米正雄	2/4	二長	drmsl	単付点	abc'b'c'd	
2	南寮	春の思ひの	柴田知常	畑耕一	2/4	ハ短	drmsldr	単付点	abcd,a'e	
2	北寮	ありとも分かぬ	世良田進	根本剛	2/4	ハ短	drmfsltdrm	単付点	ab,cdb'e	
2	中寮	夢ゆたかなる	石本己四雄	高橋浩	2/4	ホ長	tdrmm#fsl	単付点	abcd,a'	
2	朶寮	春、繚乱の	石井銀弥	藤田八郎	2/4	ハ長	drmsldr	単付点	abcd,ef	
2	東大	暮霞こもれる	朝永研一郎	松宮順	6/8 2/4	二長	drmfsltdr	その他	abca',defg	F V
2	京大	天日はるかに			12/8	変ホ	sdrmfsltd	その他	aa'bcedf	
2	九大	御代諒闇の	石川勝治	岩原拓	4/4	へ短	stdrnfsl	その他	abcd	
2	楽友会	かをりのみたま	石井銀弥	久能木楨治	4/4	ハ長	sltdrnfsltd	その他	ab,cd,ef	D F V
3	東寮	弥生が岡の夕まぐれ	石井銀弥	宮本武之輔	2/4	変口	ldrnfsl	単付点	abc,def	
3	西寮	黎明の霞		川上利器	2/4	ハ短	drmfsltdrm	単付点	abc,def	
3	南寮	春の光の	櫻井俊記	宮津栄太郎	2/4	変口短	drmsldrm	単付点	abc,def	
3	北寮	柏の濃緑色	谷 壽	阿部龍夫	2/4	ハ長	drmsltdrm	単付点	abcdef	
3	中寮	ゆれて漂ふ陽炎に	朝永研一郎	淵上房太郎	2/4	変ホ	lddrmf#fsltd	単付点	abac,de	
3	朶寮	大空舞ひて	田中久重	開口次郎	2/4	ハ長	drmfsltdr	単付点	abac,de	
3	東大	ああ香蘭の	北川 彦		2/4	変口	drmsltdrm	単付点	aba'b',cd	
3	京大	弥生が丘に、			6/8	二長	sdrmfsltdr	単付点	aa',bcad	EX V D
3	九大	まだうらわかき			4/4	二長	drmsltd	単付点	ab,ab,cd	
4	東寮	広野をわたる	黒田清	開口次郎	3/4 4/4	へ長	sltdrnfsl	その他	aa'aa,bc	EX
4	西寮	愁雲しげき桃山に	赤木勝雄	本荘可宗	2/4	ハ長	drmsldr	単付点	ab,cdeb'	
4	南寮	見よ秋千に	鹽谷 壽	阿部龍夫	2/4	変口短	drmfsltdrm	単付点	ab,cd	
4	北寮	無言に翹う向陵の		矢崎美盛	2/4	ハ短	sdrmfsltdr	単付点	ab,cd,e,f	
4	中寮	紫の眺望に満ちて	諸井貫一	高島文雄	3/4 4/4 3/4 2/4	ハ短	drmfsltdr	単付点	abcde	
4	朶寮	橄欖の森春たけて		大橋忠一	4/4	ハ長	sdrmsld	単付点	ab,a'	EX
4	東大	晴るるおもひに			4/4	変口	drmfsltdrm	単付点	ab,cb'	
4	京大	散りし櫻を踏みなづみ	弘田龍太郎		2/4 3/4	へ短	sldrmsl	単付点	abcd	
4	九大	野路の小百合の	上沼健衛	谷 茂	2/4	へ短	msltdrmsl	単付点	abcd,ef	EX
4	楽友会	ああ新緑の向陵に	楽友会	阿部龍夫	2/4	ト長	sldrmsl	単付点	ab,cd,ef	EX
5	東寮	ああ朝潮の		大石五郎	2/4	ハ長	drmsldrm	単付点	abcd,ef	
5	西寮	朧に霞む月の宴	大久保利隆	田宮知聡夫	2/4	ハ短	drmsldrm	単付点	aa'a'b,cb'	
5	南寮	闇に陰れる空寂の		福定興四郎	2/4	ハ長	drmsldrm	単付点	abcd,ef	
5	北寮	実る橄欖芳しく	赤木勝雄	渡邊秀雄	2/4	ハ長	drmsldr	単付点	Abc,d	
5	中寮	朧月夜の花の陰	矢々崎正經	福田停梯夫	6/8	二長	sdrmsl	単付点	abcdef	
5	朶寮	黄昏時の夢の國	根村當勇	高原弘	2/4	へ長	sdrmfsltd	単付点	ab,cb',de	
5	東大	橄欖のかけ柏木の	鹽谷 壽	平井好一	6/8	ハ長	sdrmfsltdrm	単付点	abcd	EX
5	京大	わがたましひの故郷は	箕作秋吉		2/4	ホ長	drmfsltd	その他	ab,ab,cb	
5	九大	われらの命の芽生えの			2/4	ト長	sdrmsl	単付点	abcd	EX
5	東北大	雲ふみわけて	吉田秀		2/4	ハ長	drmsldr	単付点	abcdef	
6	東寮	都南の翼の千萬里	土田豊	高原弘	2/4	ハ短	drmsldrm	単付点	aba'cde	
6	西寮	眞闇の影は	小池安三	小池安三 高木佑一郎	2/4	二長	drmfsltdr	単付点	abcd,ef	
6	南寮	若紫に夜は溶けて	箕作秋吉	桶高資實	3/4	ト長	sltdrnfsl	単付点	ab,cd,c',b'	EX

6	北寮	ああ青春の驕楽は	星井捷平	谷川徹三	2/4	ト長	sldrmsl	単付点	ab,cdef	
6	中寮	日は眠る	根村當勇	清野暁一郎	3/4	変ホ	drmsltd	単付点	ab,cd,e	EX
6	朶寮	櫻眞白く咲きいでて	濱尾四郎	高田休廣	2/4	変ホ	sdrmsltd	単付点	ab,cdef	EX
6	東大	とこよのさかえに	Beethoven Symphony No.9	矢崎美盛	4/4	二長	sdrms	その他	aa',ba''	EX
6	京大	比叡の山に雪消えて			2/4	ハ(ト終止)	drmsltd	単付点	abcd	
6	九大	つめたき冬の	上沼健衛	谷茂	2/4	二長	sldrmsld	単付点	abcd, cd	EX
6	東北大	青葉山			2/4	ハ長	sdrmsldrm	逆付点	abcd	EX
7	東寮	悲風惨悴	根村當勇	長澤信之助	2/4	ハ長	sldrmsldr	単付点	abcd,ef	EX
7	西寮	うららにもゆる	長谷孫重郎	橋爪 健	2/4	二長	drmsld	単付点	ab,cd,ef	
7	南寮	朧月夜に 白く	星井捷平	宮田保郎	2/4	ハ短	drmsltd	単付点	ab,cdef	
7	北寮	紫霧ふ	矢野一郎	橋高資資	2/4	ハ長	drmsltdrm	単付点	abcc'de	
7	中寮	霞一夜の	中野勇	副島 勝	2/4	二長	drmsltdrm	単付点	abacde	
7	朶寮	眠れる獅子の	箕作秋吉	松原久人	2/4	変口	drmsltd	単付点	abab',c,d	
7	東大	蘇る春の			6/8	変ホ	drmf#sldt	その他	aa',bc,a''a'''	EX
7	京大	いま京近き		牧 亮吉	4/4	二長	sldrmsfl	単付点	ab,cc'ad,	
7	九大	暗雲西に			4/4	ト長	sldrmsl	単付点	ab,cd,ef	EX
7	東北大	淡青春に			2/4	ハ長	drmsltdrm	単付点	ab,cd	
7	東寮 告別歌	月は老ゆるを	石岡武	岡崎勝男	4/4	二長	sldrmsfldr	その他	ab,cd,ef	
8		まどろみ深き	岸 偉一	氷室吉平	3/4 4/4	ハ ハ短	drmsltdrm	単付点	ab,cd,ef	
8		一博こう翔三萬里	矢野一郎	山口等	2/4	ホ長	sldrmsld	単付点	abb'cde	
8	東大	時の流れもゆるやかに	箕作秋吉		3/4	ト長	mfsldrmsl	その他	aa',ba''	EX
8	東北大	つちうらかに			2/4	ハ長	sldrmsldr	単付点	ab,cde,b'	
8	東和寮 落成	東皇回る	矢野一郎	井上萬壽藏	2/4	ハ長	drmsltdrm	単付点	ab,cd,eb'	
9		春甦る	矢野一郎	橋爪健	3/4	ハ長	drmsltdrm	単付点	aa'bc	
9		一夜の雨を	矢野一郎	安並正英	2/4	ハ長	drmsldr	単付点	aba'c,b'b'de	
9		のどかに春の	摺澤頌四郎	氷室吉平	3/4	ハ長	tdrmsltdr	単付点	ab,cb',ab''	
9		嗚呼東海の	長谷孫重郎	今井常一	2/4	ホ長	sldrmsltd	単付点	a,b,cd,e,b'	
9	東大	あかつきつぐる		二宮武治	2/4	二長	drmsltdrm	単付点	abcd	
9	九大	漁火消えゆき			4/4	二短	st#drmsl	その他	ab,c,d	
10		弥生が丘に洩れいづる	弘田龍太郎	渡邊諒	3/4	ハ長	drmsltdrm	単付点	abcd	
10		東海染むる	大野文男	高野一夫	4/4	ト長	sldrmsl	単付点	ab,cdef	
10		ああ紫の	弘田龍太郎	中村克己	4/4	ハ長	drmsld	単付点	abcd,ec'	
10	東大	春未だ若き	上田豊	今井常一	3/4	ハ長	sldrmsfl	単付点	ab,cd,ef	EX
10	東北大	御空に映ゆる			2/4	二長	sldrmsltd	単付点	ab,cdef	
10	東大	と安の春も			2/4	イ長	drmf#s ltd#rm	その他	abcdef	
11		自治の流れは	大鹽 直	田中不破三	4/4	ハ長	drmsltdrm	単付点	abac,de	
11		紫烟る	中村幸四郎	青木延春	4/4	変ホ	sdrmsltdr	その他	aa'bc	
12		流れ行く	鈴木重威	吉家鴻三	4/4	二長	ltdrmsltd	その他	abc,de	D
12		榮華は古りし	一高楽友会	青木延春	4/4	ハ長	drmsltdrm	単付点	ab,cdef	
12		夕月丘に	小野富壽郎	井上司郎	6/8	ハ長	drmsltdr	その他	aa',bc,def	
13		暁星の光消えゆき	三石	深田久弥	3/4	二長	sdrmsltd	その他	abcd	
13		白陽に映ゆる	鷺尾平吾	石田久市	6/8	ハ長	sldrmsfl	その他	aba'cde	
13		草より明けて	竹中 雪	吉富 滋	2/4	ハ長	sdrmsltdr	単付点	abc,d,e,f	
13	東大	宴して		渡邊 諒	3/4	ト→ハ	sldrmsltdrm	その他	abcdefg,h,i,jk	EX D V
13	東大	今日回り来る	岸偉一	中平章	3/4	ハ長	drmsltdrm	その他	abcd,ef	EX
13	京大	春や加茂の		福田敬之	6/8	ト長	msltdrmsfl	その他	abcde,fg	

14		杏かなる日	弘田龍太郎	郡祐一	3/4	変口	drmsldrm	単付点	abcdef	
14		橄欖の梢の尖に	弘田龍太郎	大嶋長三郎	2/4	ト長	sldrmsl	その他	abcdef	
14		しろがね遠く	竹中 雪	沼澄次	4/4	ハ長	drmsltd	その他	abcd,a'	
15		さ緑庭に	石井五六	正木篤三	3/4	二長	sldrmsld	単付点	ab,cb'	
15		あしたの星の	鶴田三郎	齋木秀雄	3/4	ハ長	sdrmsldm	単付点	ab,c,def	
15		烟り争ふ春霞	安藤熙	榎本謹吾	3/4	ハ長	drmsltdrm	単付点	aa'ba'',c,de	
15	東大	生命の泉	國鹽耕一郎	郡祐一	3/4	ハ長	sldrmsldm	単付点	ab,cd,ef	
15	東大	人の世の小昏き山路	弘田龍太郎	橋爪健	2/4	ト長	sldrmsl	その他	abcdef	

応援歌、部歌、頌歌

2	新渡戸校長 惜別歌	暮えどあはれ	亀井貫一郎	石井満	4/4	二	tdrmsltd	その他	aa',bc	T
4	柔道部凱歌	仇敵北に	「平沙の北に」	久能木横治	譜面なし					
4	御大典奉祝歌	東海波は太平の	箕作秋吉	二宮武治	4/4	変口	mfslt b drmf	その他	aa',bc	EX
5	立太子奉祝歌	いやさかえゆく	根村當勇	清野暁一郎	4/4	ハ	sldrmsl	その他	ab,ca'	
8	銃剣部部歌	瑞雲映ゆる	「東皇回る」	横溝光輝	譜面なし					
9	端艇部応援歌	ああ向陵に	矢野一郎	今井常一	2/4	ハ	sldrmsld	単付点	abcd,b'ea'd	EX
11	遠漕歌	紅香ふ朝霧に	千葉四郎	千葉四郎	2/4	二短	sdrmsld	単付点	ab,cd	EX
12	野球部応援歌	正気あふるる	弘田龍太郎	深田久弥	2/4	ト	sldrmsl	単付点	ab,cdef	
12	卒業四十年記念歌	ああわれら	三谷雄一郎	三谷雄一郎	4/4	ハ	drmsldrm	その他	abcde,e'	EX D
14	嘯雲寮	芙蓉の峰に	千葉四郎	千葉四郎	2/4	ハ	drmslldr	単付点	abcd	
14	弓術部部歌	ああ日は昇る	弘田龍太郎	郡祐一	4/4	ハ	sldrmsl	単付点	abcd,efg	EX

譜例 1

第二十七回記念祭寮歌

橋高賢實 作詞
箕作秋吉 作曲

快活に

わ か む ら さ き に よ は と け て
 む め に た だ よ う あ か つ き の
 お - か の お ぐ さ の あ お ぼ み に
 は - る の ひ か り の か げ ろ え ぼ
 あ - め に く し び の ひ び き あ り
 つ - ち に か ら く の と よ み あ り

譜例 2

第三十一回記念祭寮歌

渡邊 諒 作詞
弘田龍太郎 作曲

やよい が おかに もれい づる
いわい の こえは わこー どの
ともし び か かけ うとー らん
さんじゅー いちのー きねん さい

譜例 3

第三十六回記念祭寮歌

榎本 渥吾 作詞
安藤 照 作曲

けーぶり あらそう はーるー がすみ はーるは
みやこの はなにくれ よしうか れーおは
うーかー るとも わーれは うかれじとことわー
に ちーえと まことと ゆーじょー の
いずみを ひーむと ひとの ゆー
やよい が おーかを したい つ つ

譜例 4

第27回紀念祭寮歌(大6南)

ト調 3/4 快活ニ

5. 5 1 5 3. 3 4 3 2. 3 2 1 5 - 0
ワ カ ム ラ サ キ ニ ヨ ハ ト ケ テ
5. 5 6 7 1 3 5 5. 4 3 2 1 - 0
ユ メ ニ タ タ ヨ フ ア カ ツ キ ノ
3. 3 3 3 3. 3 6 7 1. 2 1 7 6 - 0
オ カ ノ オ グ サ ノ ア ホ バ ミ ニ
3. 3 3 3 4. 4 4 4 5. 5 4 3 6 - 0
ハ ル ノ ヒ カ リ ノ カ ゲ ロ ヘ バ
3. 3 4 3 2. 2 3 2 1. 2 1 7 6 - 0
ア メ ニ ク シ ビ ノ ヒ ビ キ ア リ
5. 5 1 2 3. 3 5 4 3. 4 3 2 1 - 0
ツ チ ニ ワ ラ ク ノ ト ヨ ミ ア リ

譜例 5

第二十七回紀念祭寮歌(大正6年南)

快活に



わ か ひ ら さ - き に よ は と け て
 ゆ - め に た だ よ う あ かつ き の
 ふ - か の む ぐ さ の あ む ば み に
 は - る の ひ か り の か げ ろ ま ば
 あ - め に く し ひ の ひ び き あ ふ
 つ - ち に か ら く の と よ み あ ふ